

スポット企画展 蘭繁之生誕 100 年 —「北の山嶺」へのまなざし—

会期：令和 2 年 4 月 1 日～6 月 25 日

蘭繁之（本名・藤田重幸）は大正 9 年に弘前市に生まれ、今年で生誕 100 年の節目を迎えた。蘭は、詩人、俳人、童謡作家、作詞家として幅広い活動を繰り広げ、また、木版画家、装丁家として活躍していたことでも知られている。特に昭和 40 年 8 月から平成 16 年 4 月まで続けられた「緑の笛豆本の会」では、主宰者として自ら装丁・造本や木版画による挿画を手掛け、その丁寧な作りは全国的に高い評価を受けている。

本展では、文学活動（詩作）と美術活動（木版画と装丁）を融合させ、生涯にわたって生地弘前で活動を続けた蘭繁之の軌跡と、郷土の文人とのかかわりを紹介した。

蘭は弘前商業専修学校時代から、東京の雑誌である『若い人』や『花籠』の懸賞募集作品に短歌、詩、俳句などを投稿する。昭和 14 年、『日本詩壇』で福田正夫、平野威馬雄、一戸謙三を、『若草』で船水清を知る。昭和 17 年、福田や平野らと同人詩誌『抒情性』を創刊。翌年、同人詩誌『草原』に一戸謙三、植木曜介、北島一夫らと名を連ねる。

一戸謙三連詩集『椿の宮』（緑の笛豆本の会 昭和 34 年 5 月 1 日）は、字彫、摺、装幀、造本、その作業工程のすべてが蘭の手によるもので、特装本の表紙には真珠が埋め込まれている（限定 50 部の内、特装 25 部）。ニューヒロサキで行われた『『椿の宮』出版を喜ぶ会』の写真には、一戸と蘭のほか、高木恭造、鳴海完造、佐々木繁らが写っており、多くの詩人、文学関係者らと交流があったことがうかがえる。



弘前市立郷土文学館 30 年のあゆみ —「北の山嶺」の人びと—

会期：令和 2 年 6 月 27 日～8 月 30 日

弘前市立郷土文学館は今年開館 30 周年を迎えた。当初は、文学館建設の構想はなく、図書館の片隅に郷土作家コーナーを設置する予定だったが、文学関係者らによる熱い市民運動が実り、平成 2 年 7 月 1 日に弘前ゆかりの「津軽文士」らの人と文学を顕彰する拠点として郷土文学館は開館した。

当館の展示室の壁面に「北の山嶺」（小野正文・編、泉尚志・画）と題する大きな絵図が掛かっている。青森県出身・ゆかりの文人とそれに関わる中央の文人を山に見立てその系列を表現したもので、その中の 9 人を常設とし、2 階には「石坂洋次郎記念室」を併設している。

今回のスポット企画展では前期（令和 2 年 6 月 27 日～8 月 30 日）、後期（令和 2 年 9 月 1 日～11 月 1 日）の 2 回に分け、過去の企画展を振り返り、前期は直筆ものを中心に約 30 点の資料を展示した。



展示の様子



歴代企画展ポスター一覧

岩木山撮影記

ラウンジのひととき

出演：菊池 敏 氏 (写真家)、佐藤 史隆 氏 (ものの芽舎代表)

8 月 22 日 (土)、弘前図書館 2 階視聴覚室でラウンジのひととき「岩木山撮影記」が開催された。菊池氏は新聞社に勤めたのち ATV (青森テレビ) に移り、勤務の傍ら写真家としても活躍、写真展「津軽の四季」を開催し写真集を複数出版するなど、現在も写真家として活動されている。佐藤氏は雑誌『あおり草子』の元編集人で、現在は出版社・ものの芽舎を設立し、『あおり草子』後継誌の制作に尽力されている。当日は観覧者全員に『あおり草子』岩木山特集号を進呈していただいた。

冒頭と終盤の写真のスライドショーでは四季折々の風景が映し出され会場を魅了した。新聞社時代のエピソードでは、プロ野球の撮影についてシャッターチャンスの難しさや自身の写真が記事に選ばれた時の嬉しさを語り、当時を回顧した。

菊池氏は弘前と五所川原から眺める岩木山を比較し、「弘前は山肌がなだらかな女性の横顔を映し、五所川原は強さや陰しさを感じる。それらはねぶたや津軽弁などの地域の風土の違いにも通ずる」と指摘。お山参詣の体験や岩木山などを撮影する際の苦労などに触れ、撮影経験を積み重ねていくとカメラを向けているものに対して感覚が鋭くなると語った。

佐藤氏は編集人からみる菊池氏の写真について、自身の撮影した岩木山に比べて飽きることがなく、それは人に見てもらい喜んでもらいたいという思いが感じられ、さらにスピリチュアルな何かがあると分析する。

菊池氏は撮影時に最も重要なことは、気配をとらえ、美しさに感動、感謝し、その瞬間を写し取ることであると語った。



6 月 6 日
「チェロとコントラバスによる二重奏」

出演：菊地 謙太郎 氏
鈴木 愛理 氏

7 月 4 日
「太宰治津軽弁セレクション」
出演：津軽カタリスト

両日インターネット中継配信を行いました。



「岩木山と文学」 —初公開資料を中心に—

北の文脈文学講座

講師：櫛引 洋一 (企画研究専門官)

新型コロナウイルスの影響で延期されていた第 1 回北の文脈文学講座が 6 月 20 日 (土) に開催された。当館企画展が初公開となる田山花袋のはがきを中心にその背景などを解説した。花袋は博文館の社員として大日本地誌編纂の取材の途中で弟の富弥が住んでいた (当時是不在) 弘前を訪れている。はがきは妻の利佐子 (里さ) 宛で弘前の石場旅館でしたためたとされる。花袋は「自然主義文学」を代表する作家で、代表作に「蒲団」「生」などが挙げられる。「生」には弘前が舞台の一つとして現れ、富弥が弘前の第八師団管下の歩兵第三十一連隊付を命ぜられたことに起因する。作中の「吉田秀雄」は富弥がモデルとなった。



開館記念 無料開館

郷土文学館は平成 2 年(1990)7 月 1 日に開館しました。

今年は開館 30 周年の節目の年だったが、新型コロナの感染拡大防止の観点から規模を縮小して開催した。毎回好評のクイズラリー、歴代企画展の記念スタンプの展示の他、オリジナルぬり絵、オリジナルすごろく (常設作家 10 人の出来事をすごろくにしたもの) の配布なども行った。



オリジナルすごろく

- 来館者の声
- ・クイズの難易度は高かったが、楽しかった。
 - ・クイズを解くことによって、展示に興味を持つきっかけになった。